

孔穴に関する引用による『医心方』と『外台秘要方』の比較

島山奈緒子

明治国際医療大学 大学院博士後期課程

本発表は、『医心方』と『外台秘要方』中の孔穴に関する引用条文を比較し、二書の関連の一端を探るものである。

『医心方』三十は、永観二年(984)に針博士の丹波康頼によって編纂され、円融上皇に献上された、現存する日本最古の医学全書である。一方、『外台秘要方』四十巻は、唐・天宝十一年(752)に王燾により編纂された医学全書である。

同様の編纂方式により編まれた二書に関連があることは、江戸時代に『医心方』の校刻に携わった多紀元堅により指摘されている。多紀元堅によれば、『医心方』は『外台秘要方』の影響を強く受けているようであるが、実例は挙げられていない。また、実際に『医心方』に『外台秘要方』からの引用と明記されている条文はわずか数例である。

孔穴に関する引用は、『医心方』では巻二 孔穴主治第一に、『外台秘要方』では巻三十九 十二身流注五臓六腑明堂にまとまっている。『医心方』の孔穴に関する条文は楊上善『黄帝内経明堂』からの引用であり、『外台秘要方』は『鍼灸甲乙経』からの引用である。

『医心方』巻二と『外台秘要方』巻三十九の関連は、どちらも『明堂音義』を参照していると、閻叔珍(「從楊玄操文の片斷看『明堂經』在唐代的流傳狀況：以『醫心方』和『外臺秘要方』等文獻爲線索」東方学報 2008)により指摘されているが、論は主に「八木之火」の記載によるもので、孔穴に関する記載には言及していない。

そこで、『医心方』では巻二 孔穴主治第一と『外台秘要方』では巻三十九 十二身流注五臓六腑明堂孔穴に引用される孔穴に関する全条文を比較した。引用条文は、二書とも、孔穴の名称・部位・鍼灸治療の指示・主治の順で記載されている。

採録される孔穴数は、『医心方』579穴(左右にある孔穴は2穴と数える)、『外台秘要方』655穴(『医心方』に同じ)で、『医心方』にしか記載のない孔穴は「曲尺」二穴、「中矩」一穴の3穴のみであり、引用される孔穴名はほとんど重複していた。

鍼灸治療に関して大きく異なる部分は、針治療に関する指示の有無であるが、『外台秘要方』には針治療に関する指示は一切記載されていない。これは以前から指摘されているように、王燾が針治療を危険なものとして採録しなかったことによる。灸治療の指示を比較すると、壮数の指示はほとんどが一致しているが、異なっているものは『医心方』では『甲乙経』に準ずるものが多い。

灸治療の指示で特に二書が異なった部分は、顔面部の孔穴に対する指示である。『外台秘要方』では、灸治療の指示(壮数)が記載されている孔穴でも、『医心方』では「灸不可」となっていたり、灸治療の指示自体が見られないものが、他の部位の孔穴よりも多く見られた。この変更は『甲乙経』には準じていない。これは、『医心方』が上皇に献上された医書であり、身分の高い人物に対する治療に使用されることを念頭に入れた、編纂における配慮であると推測される。

主治の引用は、『医心方』と比較すると『外台秘要方』の分量が多くなっている。内容を比較すると、『医心方』に引用される主治の症状は、『外台秘要方』に引用される条文に、ほぼ含まれている。主治の引用文が、二書で症状の引用が全く同じものも見られた。『外台秘要方』の引用で、現行の『甲乙経』と異なる部分も、『医心方』の引用とは合致しているものが多い。

上記の引用傾向を踏まえると、丹波康頼は『医心方』を編纂する際に、『明堂経』を下敷きとしながらも、『外台秘要方』を参考にしていたと考えられる。